

川崎病の疫学に関する研究 (分担研究：川崎病の疫学的研究)

柳川 洋 中村好一 屋代真弓 藤田委由 永井正規*
菌部友良 今田義夫 麻生誠二郎 川崎富作** 原田研介***
多田羅勝義****

要約 省略(前述と同じ)

見出し語 疫学, サーベイランス, 全国調査患者対照研究

I 川崎病の発症要因に関する患者対照研究

一発症時の家族の健康を中心に一

1. 目的

これまでの疫学調査等により, 川崎病の発病には感染が関与していることが示唆されているが, 感染で説明できない点もある。発病時に同胞, 両親になんらかの健康異常があったかどうかを調べることににより, 以下に示す仮説を検証することを目的として, 本調査を計画した。

仮説1 川崎病は微生物の感染によって発病する。

仮説2 川崎病流行時には同胞も暴露を受けている。

仮説3 発病するものは暴露を受けたものの一部であり, 大部分のものは川崎病の症状を全く示さないか, または発熱, 咽頭炎などの軽いかぜ様の症状を示す程度である。

仮説4 同胞の中でも前回流行時以降に生まれ

たものからの発生率が高い。

2. 研究対象

研究参加者の所属する医療機関を受診した川崎病患者(確実例)の母親で, 平成元年1月8日以降の入院患者の母親全員を対象とする。

コントロールは, 川崎病患者とほぼ同じ年齢(±1歳以内)で同じ性の子どもをもつ知人を母親に選んでもらった。

さらに別のコントロールとして, 調査期間内に受診した突発性発疹患者および麻疹患者についても調査を行った。このコントロールは川崎病患者の受診にかかわらず調査期間内の受診者全員を対象とした。

3. 研究方法

調査票の作成は以下の順序によった。

(1) 川崎病患者が受診したら, 受診後できるだけ早い時期に母親に調査票の記入を依頼する。あらかじめ主治医記入欄に必要事項(初診年月日,

* 自治医科大学公衆衛生学教室 (Dept. of Public Health, Jichi Medical School)

** 日赤医療センター小児科 (Dept. of Pediatrics, Japan Red Cross Medical Center)

*** 日大医学部小児科 (Dept. of Pediatrics, Nihon Univ School of Medicine)

**** 東京女子医大第2病院小児科 (Dept. of Pediatrics, Tokyo Women's Medical College, 2nd Hospital)

発病年月日，診断年月日，入院，診断名，主要症状等)を記入する。

(2) 調査票の記入もれの有無をチェックし，必要があれば主治医が直接母親に質問する。

4. 調査項目

患者発病前後の両親および同胞の健康状態，疾病罹患傾向，過去3カ月の医療機関受診状況，発病前後の行事，その他の誘因，近隣の患者発生状況などである。

5. 研究成績

調査を開始したところであり，症例の収集はこれから始める予定である。

II 川崎病全国疫学調査成績

1. はじめに

1970年に第1回川崎病全国調査が実施されてから9回の調査が行われ，1986年までに，83,857名の患者が報告された。

その後2年経過したので，1989年1月に1987年1月から1988年12月までの2年間に発病した患者を対象とした第10回の川崎病全国調査を開始したところである。

2. 研究方法

1987年1月-88年12月の2年間に全国100床以上の病院を受診した患者を対象とした調査で，調査票により患者の性，年齢，住所，初診日，初診時病日，診断の確実性，薬剤の使用，再発，同胞発生，死亡，心後遺症，心エコー実施などを調べた。

3. 研究成績

調査票を送った施設数は2,250カ所である。1989年3月末日現在1,438施設(63.9%)から調査票の回収があった。調査票は患者に関する記録と施設に関する記録にわけて電算機によりファイルを作成して解析を行う予定である。

III 川崎病サーベイランス調査成績

1. 目的

川崎病の流行がおきたとき，第一線の医療機関ができるだけ早く流行の存在を察知し，地域的な流行の進行状況を把握する必要があると考え，本研究班の疫学プロジェクトとして，1984年1月より全国の主要施設の協力を得て，川崎病サーベイランス事業を実施してきた。

2. 研究方法

この事業は本研究班が過去に実施してきた全国疫学調査で，患者報告数の多かった147カ所の病院の協力を得て，毎月はがきにより1カ月間の患者数を性別，上・中・下旬別に報告してもらった。

3. 研究成績

1988年12月末日までにサーベイランス事業で報告された過去5年間の患者報告数は(1989年1月20日の集計時現在)，表1に示すように1984年2,204人，1985年2,523人，1986年3,736人，1987年1,814人，1988年1,554人であり，合計11,831人である。

本事業で報告された患者数は全国で発生した患者数の約1/3に相当することが全国疫学調査成績との対比により明らかにされている。この点を考慮してサーベイランス成績から全国患者数の推定を行い，月別に図表化したものが図1である(1986年までは全国調査の成績がわかっており，よく一致している)。1985年11月-1985年5月の間に大規模な流行があったが，以後1987年，1988年ともに患者発生数は少なく，前者で5,400人程度，後者で4700人程度であった。

表2および図2は，1984年1月~1988年12月までの5年間にサーベイランス事業で報告された全国および地方別，月別患者報告数である。全国および各地域とも，1985年11月から1986年5月にみられた流行以後に著しい患者増はみられない。

表1 川崎病サーベイランス5年間の月別・性別患者数

1989年1月20日現在

	1984			1985			1986			1987			1988		
	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女
総数	2,204	1,282	922	2,523	1,464	1,059	3,736	2,112	1,624	1,814	1,108	706	1,554	925	629
1月	177	111	66	170	90	80	701	383	318	165	93	72	168	91	77
2月	183	101	82	150	97	53	714	424	290	131	76	55	142	91	51
3月	217	126	91	185	116	69	618	326	292	177	115	62	112	78	34
4月	227	129	98	158	91	67	360	201	159	156	100	56	124	74	50
5月	292	178	114	165	95	70	299	164	135	172	114	58	126	84	42
6月	226	135	91	159	89	70	173	103	70	175	102	73	141	79	62
7月	187	111	76	198	112	86	181	105	76	180	96	84	141	81	60
8月	149	85	64	153	92	61	154	93	61	139	92	47	132	76	56
9月	140	83	57	145	82	63	161	93	68	144	98	46	133	69	64
10月	125	62	63	122	71	51	89	62	27	124	78	46	101	62	39
11月	133	79	54	321	187	134	116	65	51	116	64	52	106	65	41
12月	148	82	66	597	342	255	170	93	77	135	80	55	128	75	53

図1 サーベイランスによる月別患者発生数の推定

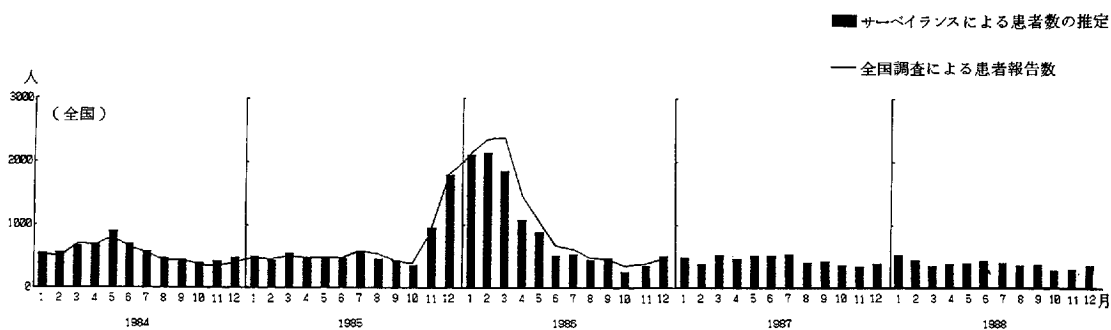


表2 川崎病サーベイランス

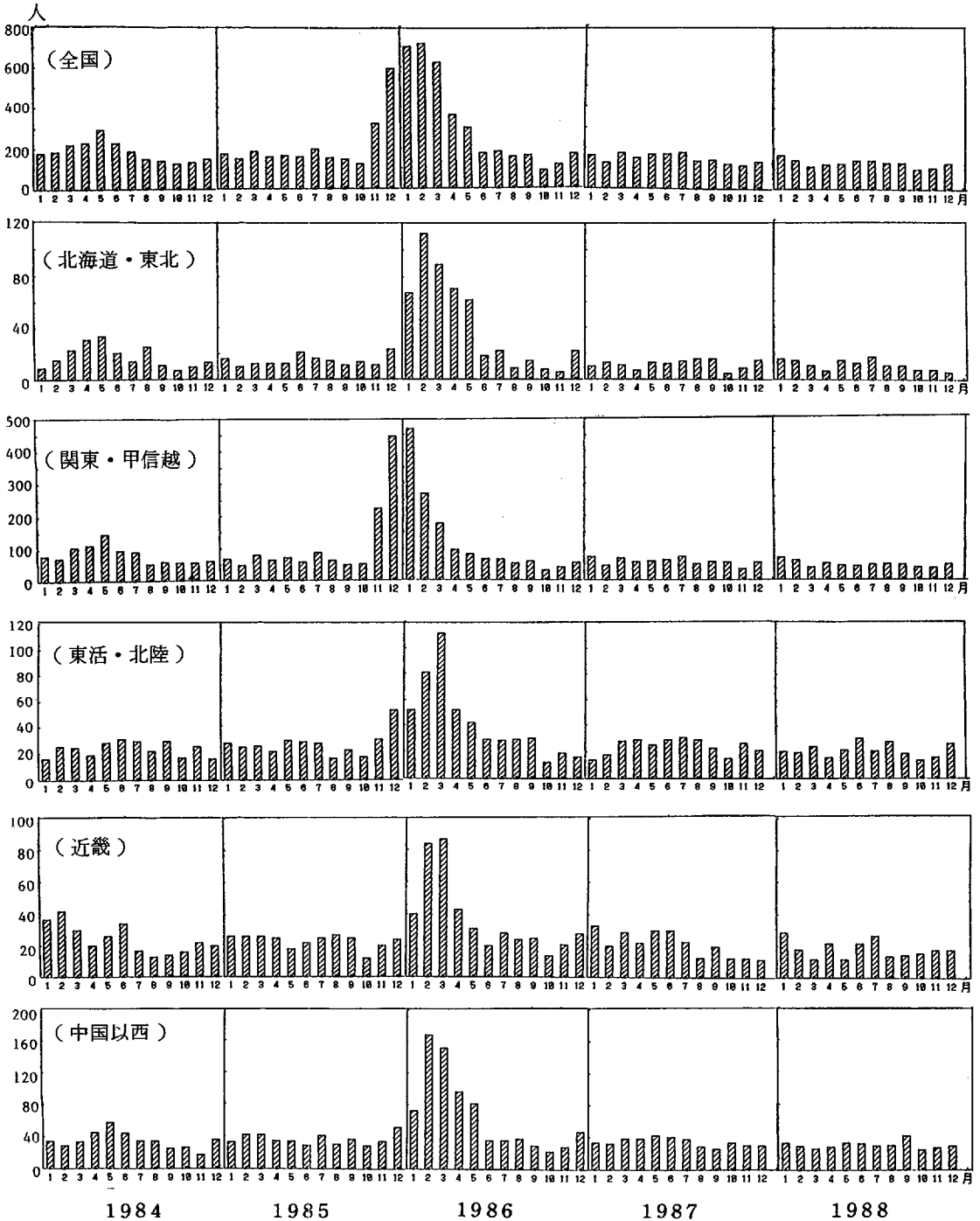
	1984						1985						19		
	全国	北海道 東北	関東 甲信越	東海 北陸	近畿	中国 以西	全国	北海道 東北	関東 甲信越	東海 北陸	近畿	中国 以西	全国	北海道 東北	関東 甲信越
総数	2,204	213	999	281	291	420	2,523	171	1,322	318	276	436	3,736	505	1,475
1月	177	9	88	16	37	35	170	16	68	27	26	33	701	68	469
2月	183	15	72	25	42	29	150	10	48	24	26	42	714	112	268
3月	217	23	106	24	30	34	185	12	80	25	26	42	618	89	179
4月	227	31	112	19	20	45	158	12	65	21	25	35	360	71	97
5月	292	34	146	28	26	58	165	12	72	29	18	34	299	62	82
6月	226	21	96	31	34	44	159	21	59	28	22	29	173	19	69
7月	187	14	92	29	17	35	198	16	89	27	25	41	181	23	66
8月	149	25	54	22	13	35	153	14	65	16	27	31	154	9	54
9月	140	11	61	29	14	25	145	11	51	22	25	36	161	15	61
10月	125	7	58	17	16	27	122	13	52	17	12	28	89	8	32
11月	133	10	59	25	22	17	321	11	226	30	20	34	116	6	42
12月	148	13	63	16	20	36	597	23	447	52	24	51	170	23	56

5年間の月別・地方別患者数

1989年1月20日現在

86			1987						1988					
東海 北陸	近畿	中国 以西	全国	北海道 東北	関東 甲信越	東海 北陸	近畿	中国 以西	全国	北海道 東北	関東 甲信越	東海 北陸	近畿	中国 以西
501	445	810	1,814	141	712	288	258	415	1,554	139	573	258	223	361
52	40	72	165	10	74	14	33	34	168	16	69	21	29	33
81	84	169	131	13	48	18	20	32	142	15	60	20	18	29
111	87	152	177	11	70	28	29	39	112	11	39	24	12	26
52	43	97	156	7	59	29	22	39	124	7	51	16	22	28
42	31	82	172	13	61	25	30	43	126	15	44	22	12	33
29	20	36	175	12	64	29	30	40	141	13	43	31	22	32
28	28	36	180	14	74	31	23	38	141	18	46	21	27	29
29	24	38	139	16	52	29	13	29	132	11	49	28	14	30
30	25	30	144	16	59	23	20	26	133	11	47	19	15	41
12	14	23	124	5	57	15	13	34	101	8	39	14	16	24
19	21	28	116	9	37	26	13	31	106	8	37	16	18	27
16	28	47	135	15	57	21	12	30	128	6	49	26	18	29

図2 全国および地方別月別患者数の推移



4. 考察とまとめ

わが国では川崎病は1979年春、1982年春、1985年冬の3回にわたり全国的な流行がみられた。最後の流行が終息した1986年6月以来今日まで2年半になるが、患者の増加傾向はまったくみられない。1988年の発生はむしろ例年より少

ない傾向を示している。

これまで3回にわたり、3年間隔の流行がみられ、これは感受性者の蓄積による集団免疫の低下が原因ではないかと考えられていた。1989年に再び流行がある可能性もあり、注意深く患者発生状況を監視しなければならない。

Abstract

Epidemiological study of Kawasaki disease

Hiroshi Yanagawa, Yosikazu Nakamura, Mayumi Yashiro,

Yasuyuki Fujita, Masaki Nagai

Tomoyoshi Sonobe, Yoshio Imada, Seiji Aso, Tomisaku Kawasaki

Kensuke Harada, Katsuyoshi Tatara

The results of the co-operative studies conducted by the epidemiology group of Kawasaki Disease Research Committee can be summarized as follows :

1. A case-control study on etiological factors of Kawasaki disease

The study is concerned about the frequency of common-cold-like symptoms among the family members of the patients. The main purpose of this study is to confirm the hypothesis that (1) the disease is caused by an infectious agent, (2) most of the siblings of the patient are exposed to the agent without developing the disease.

The subjects of the study are cases diagnosed in January 1989 or after and three different controls, healthy controls, hospital controls (measles and exanthema subitum). The study is now in progress.

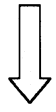
2. Nationwide survey on Kawasaki disease

The 10th nationwide survey was conducted in January 1989. The subject of the survey was all the patients with Kawasaki disease who were diagnosed in a two-year period from January 1987 to December 1988.

The survey forms were sent to 2,250 hospitals throughout Japan. 1,438 hospitals responded to the survey as of March 31.

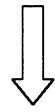
3. Surveillance of Kawasaki disease

Surveillance data on Kawasaki disease from 147 representative hospitals throughout Japan revealed that no epidemic was seen since the last epidemic in the winter of 1985-86. The estimated number of patients in 1987 and 1988 are 5,400 cases and 4,700 cases, respectively.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



昭和 63 年度厚生省心身障害研究

「川崎病に関する研究」

分担研究

川崎病の疫学に関する研究

柳川洋

疫学研究班は本年度 4 種類のプロジェクト研究を実施した。第 1 のプロジェクトは「川崎病の発症要因に関する患者対照研究」で、柳川洋、中村好一、園部友良、今田義夫、麻生誠二郎、原田研介、多田羅勝義が担当した。この研究は、

川崎病は微生物の感染によって発病する。

川崎病流行時には同胞も暴露を受けている。

発病するものは暴露を受けたものの一部であり、大部分のものは川崎病の症状を全く示さないまたは発熱、咽頭炎などの軽いかぜ様の症状を示す程度である。

同胞の中でも前回流行時以降に生まれたものからの発生率が高い、という 4 つの仮説を検証する目的で実施するもので、日赤医療センター、日大板橋病院、東京女子医大第二病院で、症例の収集を開始した。他の研究班関連施設にも参加を呼びかける予定である。

第 2 のプロジェクトは「第 10 回川崎病全国調査」で柳川洋、中村好一が担当した。1987 年 1 月 - 88 年 12 月の 2 年間に全国 100 床以上の病院を受診した患者を対象とした調査で、1989 年 3 月末現在 1,438 施設から調査票の回収があった。

第 3 のプロジェクトは「川崎病のサーベイランス」で柳川洋、中村好一が中心になって本年度も継続した。この研究は、迅速な流行の認知を目的として、全国 147 施設から毎月患者数を報告してもらっている。1988 年 12 月で 5 年間継続したことになる。本年度はまったく流行の兆候はみられなかった。

第 4 のプロジェクトは「ガンマグロブリン療法に関する研究」で、古庄巻史が中心になって 16 施設の共同研究として、冠状動脈障害の出現を予防することを目標にガンマグロブリン療法の評価を行った。

個別研究として、中村好一は「川崎病心後遺症の発生頻度の時系列変化」、「川崎病死亡例の研究」、「世界における川崎病発生状況」などの研究を実施した。